

角川文庫

古今和歌集
こ きんわ かしゆう



昭和四十八年一月三十日 初版発行
昭和五十年六月三十日 四版発行

定価は、カバーに
明記してあります

校注者 窪田章一郎
くぼ た しょういち ちろう

発行者 角川源義
かくがわ げんぎ

印刷者 橋本伝四郎
しらかわ へんしやう じろう
市川市湊新田六十一

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三 株式会社 角川書店
〒一〇二 東京一九五二〇八

電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたしません

Printed in Japan 新興印刷・本間製本

0192-404601-0946(1)

古 今 和 歌 集

窪田章一郎校注

角川文库

2838

凡例

一、本書は嘉禄二年四月九日の藤原定家の奥書のある伊達家本を底本とした。底本には真名序がないので、定家の書写した貞応二年本をもって補った。

二、文庫本の方針にしたがい、底本の文字そのままを復原せず、読みやすく改めたところがある。「剣」「南」「覧」「哉」「物を」「けむ」「なむ」「らむ」「かな」「ものを」と改めたのは、その一例である。仮名づかい、送り仮名も歴史的仮名づかいに統一し、漢字を仮名に、また仮名を漢字に改めたところもある。いずれも現代の読者に親しみやすくした範囲内の改訂で、底本の文章と歌とは忠実に伝えている。

三、脚注は、主として語句について記した。なお、脚注とすべきものを補注に移した部分もあるので、参照されたい。

四、補注は、主として歌意について記し、必要と思われる歌には現代語訳をほどこした。また、鑑賞にわたる部分もある。脚注とあわせて、この歌集の理解に役立てたいと思うのが方針である。また、仮名序の現代語訳を添えた。

五、この歌集の諸伝本には、語句のちがいがあある。本書ではその細部にはわたらず、歌意に重要

な意味をもつと思われるもののみをとりあげ、補注に記すこととした。

六、巻末の「異本の歌」は、底本以外の諸伝本にある歌を参考のために挙げた。

七、「作者略伝・作者別索引」「初句四句索引」は、随時使用されたい。なお歌の「索引」は長歌・旋頭歌は初句のみとした。これは寺田純子氏の協力を得た。

目次

凡例

仮名序

卷第十一	恋歌一
卷第十	物名
卷第九	羈旅歌
卷第八	離別歌
卷第七	賀歌
卷第六	冬歌
卷第五	秋歌下
卷第四	秋歌上
卷第三	夏歌
卷第二	春歌下
卷第一	春歌上

三	二〇	一〇四	九	八	三	六	五	四	三	九	七	三
---	----	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

卷第十二	恋歌二	一三
卷第十三	恋歌三	一四
卷第十四	恋歌四	一七
卷第十五	恋歌五	一七
卷第十六	哀傷歌	一八
卷第十七	雜歌上	一九
卷第十八	雜歌下	二二
卷第十九	雜 躰	三六
卷第二十	大歌所御歌	四六
墨滅歌		四五
真名序		二五
異本の歌		二六
補 注		二六
解 説		三五
作者略伝・作者別索引		三六
初句四句索引		四四

やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりけ
 る。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、
 見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり。花に鳴く鶯、水に
 すむかはづのこゑをきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよ
 まざりける。力をもいれずして、天地をうごかし、目に見えぬ鬼神
 をもあはれとおもはせ、男女のなかをもやはらげ、たけきもののふ
 の心をもなぐさむるは歌なり。

この歌、天地のひらけはじまりける時よりいできにけり。へ天の
 浮橋のしたにて、女神男神となりたまへる事をいへる歌なり。し
 かあれども、世につたはることは、ひさかたの天にしては、下照姫
 にはじまり、へ下照姫とは、天稚御子の妻なり。兄の神のかたち岡
 谷にうつりてかがやくをよめる夷歌なるべし。これらは文字の数も

- 一 和歌、倭歌、倭詩とも書き、漢詩に対しての日本の歌。
- 二 人の心をもととして多くの歌になる。種、葉は植物にたとえる。
- 三 世の中に生存している人間。
- 四 生活上の事件と行為。
- 五 蛙の一種の河鹿(かじか)。清らかな川に棲み、涼しい声で鳴く。
- 六 すべての生物。
- 七 天地の神々を感動させる。
- 八 死者の靈魂。
- 九 勇猛な武人。
- 一〇 天地開闢のはじめから。
- 一一 細字の部分は古注と呼ばれ、原文にはなく、後から書き添えられたもの。以下すべておなじ。こはイザナギ・イザナミの二神が国土を修理固成した神話による。
- 一二 「ひさかたの」「あらがねの」は、天と地との枕詞。高天が原と地上とを対させる。
- 一三 天孫降臨に先立って地上へ下ったアメワカヒコ(古注の天稚御子は誤り)の妻となった国つ神の娘で、高天が原でのアメワカヒコの葬儀に、その兄アジスキタカヒコネノカミの美貌を讃えた歌が日本書紀の一書の伝えにある。
- 一四 夷曲(ひなぶり)とあるもの。歌曲の名。

さだまらず、歌のやうにもあらぬことどもなり。あらがねの地に
 しては、素盞鳴尊すさのをのみことよりぞおこりける。ちはやぶる神代には、歌の文
 字もさだまらず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人
 の世となりて、素盞鳴尊よりぞ、三十文字あまり一文字はよみける。
 へ素盞鳴尊は天照大神あまてるおほんかみのこのかみなり。女よめとすみたまはむとて、出
 雲国ものくにに宮造りしたまふ時に、その所に、やいろの雲のたつを見て、
 よみたまへるなり。八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその
 八重垣を。

かくてぞ花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ
 心言葉おほく、さまざまになりける。遠き所も、いでたつ足もと
 よりはじめりて、年月としつきをわたり、高き山も、麓のちりひぢよりなり
 て、天雲あまぐもたなびくまでおひのぼれるごとくに、この歌もかくのごと
 くなるべし。難波津ななばたの歌は、みかどのおほんはじめなり。へおほさ
 さぎのみかどの、難波津にて、皇子みこときこえける時、東宮とうきうをたがひ
 にゆづりて位につきたまはで、三年みとせになりければ、王仁わにといふ人
 のいぶかり思ひて、よみてたてまつりける歌なり。この花は梅の花

一「ちはやぶる」は、枕詞。「神代」つづく「人の世」に対応させている。

二歌の発生を悠久な神代のこととし、五音七音の短長句による定型詩の成立以前とする意。

三定型詩である短歌の成立。古事記のササノオノミコトの短歌をよりどころとする。古注参照。

四兄。アマテラスオオミカミの兄とするのは誤り。

五クシナダヒメとの結婚。

六「八雲」は幾重にも重なる多くの雲。それを八色の雲と解したのは誤り。

七白楽天の座右の銘「千里は足下より始まり、高山は微塵より起る。吾が道も亦此の如し。之を行ふこと日に新なるを貴ぶ」を踏まえて書く。

八「そへ歌」の例歌として後出。

九天皇の御代の初めを祝った歌。

一〇仁徳天皇。

一一今の大阪市の一部の旧名。

一二東宮である弟のウジノワキイ

一三百濟(くだら)から帰化した学者。

一四安積山の歌。↓補注。

一五地方から選ばれて、天皇の御

をいふなるべし。^{一四あさかやま}安積山のことばは、^{一五うねめ}采女のたはぶれよりよみて
^{一七かづらきのおほきみ}へ葛城王を、^{一八}みちのおくへつかはしたりけるに、^{一九}国のつかさ、事
 おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、
 采女なりける女の、^{二〇}かはらけとりてよめるなり。これにぞおほきみ
 の心とけにける。^{二二ふたうた}この二歌は、^{二一ちちはは}歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人
 のはじめにもしける。

そもそも、^{二三うた}歌のさま、六つなり。唐のうたにもかくぞあるべき。
 その六くさの一つには、^{二三}そへ歌。おほささぎのみかどをそへたてま
 つれる歌。

^{二四なにはづ}難波津に咲くやこの花冬ごもりいまは春べと咲くやこの花
 といへるなるべし。

二つには、^{二五}かぞへ歌。

^{二六}さく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるもしら
 ずて

といへるなるべし。

へこれは、ただごとにいひて、ものにたとへなどもせぬものなり。

膳に奉仕した女官。

二六 戯れの心から詠む。

二七 橋諸兄（六八四―七五七）か
 という。

二八 東北地方。安積山は福島県。

二九 国司の待遇が疎略で、酒宴の
 用意などをしたが不機嫌であった。

三〇 酒杯。

三一 この二首は、作者が男（王仁）
 と女（采女）とであるため「父母」
 という。

三二 「さま」は、心と詞（ことば）
 とに分けず、総合的に和歌を把握
 するもので、「姿」「風体」とおな
 じ。漢詩に六義のあるののつと
 り、真名序で和歌にもそれがあ
 り、現上での和歌を、假名序では「歌
 のさま六つ」として列挙する。漢
 詩の六義は、風雅頌が内容の分類、
 賦比興が表現の分類とされている
 が、「さま」も両者にわたり、表
 現上の分類が中心となつてゐる。

三三 物になぞらえて詠む、譬喩的
 表現の歌。風に当てる。

三四 歌意↓補注。

三五 物の名を並べ数えるように詠
 む歌の意かという。直接的表現で、
 賦に当てる。

三六 歌意↓補注。

この歌いかにいへるにかあらむ。その心えがたし。五つに、ただこ
と歌といへるなむ、これにはかなふべき。〽

三つには、な^一ずらへ歌。

君^二にけさあしたの霜のおきていなばこひしきごと^三に消えやわた
らむ

といへるなるべし。

へこれは、物にもなずらへて、それがやうになむあるとやうにいふ
なり。この歌よくかなへりとも見えず。たらちめの親のか^四ふ蚕^五のま
ゆごもりいぶせくもあるか妹^六にあはずて、かやうなるや、これには
かなふべからむ。〽

四つには、たとへ歌。

わが恋はよむともつきじありそうみの涙のまさごはよみつくす
とも

といへるなるべし。

へこれは、よろづの草木^{くさき}、鳥獸^{とりけだもの}につけて、心を見するなり。この歌
は、かくれたる所なむなき。されど、初めのそへ歌とおなじやうな

一 物になずらえて詠む、譬喩的表現の歌。比に当てる。

二 歌意↓補注。「君に」は「君が」が妥当（伝俊頼本）。「あしたの霜の」は、「おき」の序詞で、死ぬ意の「消え」は、霜の縁語。

三 母親の飼う蚕が繭にこもっている、そのように心の晴れないことであるよ、妹に逢わなくて。万葉集卷十二の歌（二九九一）で、作者未詳。拾遺集卷十四に人麿として採られる（八九五）。上句は「いぶせく」の序詞。

四 物にたとえて詠む、譬喩的表現の歌。興に当てる。

五 歌意↓補注。

六 興は隠喩であるとする立場から、歌の心が隠されず、あらわであるという批評。

れば、すこしさまをかへたるなるべし。須磨セのあまの塩やくけぶり
風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり、この歌などや、かなふべ
からむ。▽

五つには、ただごと歌。

い九つはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしから
まし

といへるなるべし。

へこれは事一〇のとのほり、ただしきをいふなり。この歌の心さら
かなはず。とめうたとやいふべからむ。山桜二あくまでいろを見つ
かな花ちるべくも風吹かぬ世に。▽

六つには、いは三ひ歌。

この殿三はむべもとみけりさきくさの三つば四つばにとのづくり
せり

といへるなるべし。

へこれは世をほめて神につぐるなり。この歌、いはひ歌とは見え
なむある。春日野四にわかになつみつよろづ代をいはふ心は神ぞし

七 卷十四（七〇八）の歌。

八 たとえもせず、平常の言葉
でありのままに詠む、直接的表現
の歌。雅に当てる。
九 卷十四（七一二）の歌。

一〇 政教上の事が整い、正しい意
を雅とする立場から古注は批判す
る。「偽のなき世」に、その意が
あるとする説もある。「とめ歌」
もその意味で、正を求める「もと
め歌」かともいわれる。「この歌」
以下香川景樹は「この歌などやい
ふべからむ」などと考え、次の歌
へつづく文の誤写かという。

二 山桜の美しい色を堪能するま
で見たことよ。花の散りそうにも
風の吹かない泰平な世に。続古今
集卷二に採られている平兼盛の歌
（二〇四）。古注の考える「ただご
と歌」の適例であろう。

三 ことほぐ心を詠んだ歌で、内
容による分類。頌に当てる。

三三 歌意↓補注。
四 卷七（三五七）の歌。

らむ。これらやすこしかなふべからむ。おほよそ六くさにわかれむことは、えあるまじきことになむ。▽

今の世^一の中、色につき、人の心花になりけるより、あだなる歌、はかなき言^{こと}のみいでくれば、色^三好みの家に、埋^{うも}れ木の^二人知れぬこととなりて、まめ^四なる所には花^五すすきほにいだすべきことにもあらずなりたり。

その初めを思へば、か^六かるべくなむあらぬ。いにしへの代々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さ^七ぶらふ人々をめて、ことにつけつつ、歌をたてまつらしめ給ふ。あるは花をそふとて、たよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなきやみにたどれる、心々を見給ひて、さ^九かしおろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さ^二ざれ石にたとへ、筑^二波山^{つくば}に^{やま}かけて君をねがひ、よろこび身にすぎ、たのしび心にあまり、富^二士^しのけぶりによそへて人をこひ、松^一虫^{むし}のねに友をしのび、高^一砂^{すな}住^{すま}の江の松も、相^あ生^ひのやうにおぼえ、男^一山^{やま}のむかしを思ひ出でて、女^一郎^{らう}花^{はな}のひとときをくねるにも、歌^一をいひてぞなぐさめける。また、春^あの朝^{した}に花の散るを

一 世の中が派手におもむき、人の心が華美になる。

二 軽い、実のない歌。とりとめのない歌。

三 好色の人の間に愛好されて、人に知られることなく埋もれる。

四 「埋れ木の」は「知れぬ」の枕詞。

五 「まじめな改まった場所。「色好みの家」即ち恋愛の私的な歌の場に対する宮廷の公的な歌の場。

六 「花すすき」は「ほ」の枕詞で、表立って出すことができない。

七 現在の墮落した状態であるべきではない。

八 帝に奉仕する人々。

九 ある時は。「花をそふ」の「そふ」は、「こふ」（恋ふ）とある本がいいであろう。

一〇 賢愚をお知りになった。

一一 「しか」は、帝と臣下との間の公的な場を受け、以下、種々な場で詠まれた和歌について、巻々の和歌の語句を連ねて述べる。

一二 賀歌（三四三）。

一三 東歌（一〇九五）。

一四 雑歌（八六五）。

一五 恋歌（五三四）。

一六 秋歌（二〇〇）。

一七 雑歌（九〇九）（九〇五）。

一八 雑歌（八八九）。

一九 雑歌（二〇一六）。

見、秋の夕暮に木の葉のおつるをきき、あるは、年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とをなげき、草の露水の泡を見てわが身をおどろき、あるは、きのふはさかえおごりて、時をうしなひ、世にわび、したしかりしもうとくなり、あるは松山の波をかけ、野中の水をくみ、秋はぎの下葉をながめ、暁の鳴の羽搔きをかぞへ、あるは呉竹のうきふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨みきつるに、今は富士の山も煙たたずなり、長柄の橋もつくるなりときく人は、歌のみぞ心をなぐさめける。

いにしへよりかく伝はるうちにも、ならの御時よりぞひろまりにける。かの御代や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、おほきみつのくらるかきのもとの人まろなむ歌の聖なりける。これは君も人も身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、竜田川にながるる紅葉をば、帝の御目には錦と見たまひ、春のあした、吉野の山の桜は、人まろが心には、雲かとのみなむおぼえける。また、山の辺の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。人まろは、赤人がかみにたたむことかたく、赤人は、人まろがしもにたた

元 和歌を詠んで、人々は喜怒哀楽の心を慰めた。

三 物名(四六〇)。

三 哀傷歌(八六〇)、恋歌(八二七)。

三 東歌(一〇九三)。

三 雑歌(八八七)。

三 秋歌(二二〇)。

三 恋歌(七六一)。

三 雑歌(九五七)。

三 恋歌(八二八)。

三 以上のように、さまざまな思いを歌に詠んで来たのであるが。

元 (五三四)(一〇二八)には富士の噴煙が詠まれているが、序文

の書かれたころは絶えていた。

三 雑躰(一〇五一)。

三 古歌に親しむことによつてのみ、心を慰めた。

三 平城天皇の御代(八〇六—八〇九)。

三 奈良時代とする説もある。

三 和歌の本質。

三 正三位柿本人麿。持統・文武朝の歌人。実際は六位以下と考えられる。

三 秋歌(二八三)。古注に引かれる。

三 これに当たる歌は人麿にない。

三 山部赤人。聖武朝の歌人。

三 山部赤人。聖武朝の歌人。

三 山部赤人。聖武朝の歌人。

三 山部赤人。聖武朝の歌人。

三 山部赤人。聖武朝の歌人。

むことかたくなむありける。へならのみかどの御歌、たつた川紅葉
みだれてながるめりわたらばにしき中^{なか}やたえなむ。人まろ、梅^一の花
それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば。ほ^二のほのとあ
かしのうらのあさ霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ。赤人^三、春^三ののに
すみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜^{ひと}ねにける。わか^四の浦に
しほみちくれば^{かた}鴻をなみ^{あし}蘆^{あし}べをさしてたづ鳴きわたる。この人々
をおきて、又すぐれたる人も、呉竹^五の世々にきこえ、片糸^六のよりよ
りにたえずぞありける。これよりさきの歌をあつめてなむ、万葉集^{まんえふしよ}
となづけられたりける。

ここにいにしへのことをも、歌の心をも知れる人わづかに一人^{ひとり}二
人^{たり}なりき。しかあれど、これかれ得たるところ得ぬ所、たがひにな
むある。か^九の御時よりこのかた、年は百年^{ももとせ}あまり、世は十^とつぎにな
むなりにける。いにしへの事をも歌をも知れる人よむ人おほからず。
いまこの事^{こと}をいふに、司位^{つかさくらゐ}たかき人をば、たやすきやうなればい
れず。そのほかに、ちかき世^よにその名^なきこえたる人はすなはち、僧^{そう}
正遍昭^{じやうへんせう}は、歌^{うた}のさまは得たれども、ま^{一四}ことすくなし。たとへば、絵^ゑ

- 一 冬歌(三三四)。
- 二 蜀旅歌(四〇九)。
- 三 万葉集卷八(一四二四)。
- 四 万葉集卷六(九一九)。
- 五 「代」の枕詞。御代御代に。
- 六 「よりより」の枕詞。折々に。
- 七 人曆・赤人より以前の歌。万葉集を平城天皇の御代の勅撰和歌集と考えていたことが知られる。
- 八 以下四行、文章に錯簡がある。うと古来問題になっている。「かの御時よりこのかた、年は百年あまり、世は十つぎになむなりにける。ここにいにしへのことをも、歌の心をも知れる人わづかに一人二人なりき。しかあれど、これかれ得たる所得ぬ所、たがひになむある」が原文かという。
- 九 平城天皇の即位の大同元年(八〇六)から醍醐天皇の延喜五年(九〇五)まで、百年。天皇は十代となる。
- 一〇 軽々しいようだから加えない。
- 一一 六歌仙と呼ばれた歌人たち。
- 一二 ↓略伝。
- 一三 「そのま」→九頁の注二二。
- 一四 全心的な心。真実感。
- 一五 譬喩による具体的な説明で、以下、おなじ方法を用いる。

にかけの女をうなを見て、いたづら二六に心をうごかすがごとし。へ浅一七みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か。はちすばの一八にこりにしまぬ心もて何かは露をたまとあざむく。さが野にて馬よりおちてよめる、名一九にめでてをれるばかりそをみなへし我おちにきと人にかたるな。〽

在原業平は、その心あまりて、ことばたらず。しほめる花の色な二〇くて匂ひ残れるがごとし。へ月二三やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして。大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの。ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな。〽

文屋康秀は、ことばはたくみにて、そのさま身におはず。いはば、あき人のよき衣きぬきたらむがごとし。へ吹二九くからによもの草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ。深草のみかどの御国忌みこ忌に、草三〇ふかき霞の谷にかけかくし照る日のくれし今日にやはあらぬ。〽

宇治山の僧喜三二撰は、ことばかすかにして、はじめをはりたしかならず。いはば、秋三三の月を見るに、暁の雲にあへるがごとし。へわが三四

二六 感動しても空しい意。
二七 春歌（二七）。

二八 夏歌（一六五）。

二九 秋歌（二二六）。

三〇 ↓略伝。

三一 心と詞との調和がとれない。その調和に「さま」を認めるのが批評の標準。しかし心の豊かさに歌の価値を認めた上での批評。

三二 梅の花などを心に置いての譬喩。「色なくて」は、詞の不足。

三三 恋歌（七四七）。

三四 雑歌（八七九）。

三五 恋歌（六四四）。

三六 ↓略伝。

三七 詞が巧みで、歌のさまから批評すると、心にふさわしくない。

三八 商人。それを心にたとえ、「よき衣」を詞にたとえ、「さま」の不調和な譬喩とする。

三九 秋歌（二四九）。第二句「秋

の」。

四〇 哀傷歌（八四六）。

四一 ↓略伝。

四二 始終で、歌の「さま」。

四三 秋の月が暁の雲に逢って、はつきりとした姿を譬喩とする。

四四 雑歌（九八三）。